

水辺だより



1994年6月

ぼやぼやして5月のたよりを出さないうちに6月号となりました。つい梅雨に、入ってしまったようです。

HELP! 8/20・21

福島潟サミット「北限のオニバス」にご協力おねがいします。

豊栄市東部に位置する福島潟は、「21世紀に残したい日本の自然100選」、「いがた景勝100選」にも選ばれている、潟湖です。また全国でも絶滅の危機にあるオニバスの、北限の自生地です。

豊栄市は、自然と文化の創造拠点として、「福島潟」から全国に向けて情報発信していきたいと考え、今年度から自然や文化をテーマに毎年「福島潟サミット」を開催することにしました。今回はオニバスをテーマに、地域社会や人間生活との関わりのなかで、自然環境の保全と創造はいかにあるべきかを考えるサミットになります。

新潟の水辺を考える会はこの主旨に賛同し、協力団体になりました。協力団体というのは、サミットの開催に汗を流す、地元の人たちとワイワイ交流する団体なのです。

主催者側からもぜひ当日の運営スタッフとして力を貸してと頼まれています。会員のみなさんでこの日都合のつく方は、協力スタッフとしてきていただけないでしょうか？。

期日：1994年8月20日（土）～21日（日）

会場：豊栄市中央公民館

対象：全国のオニバス研究者・自然愛好者・市民

主催：豊栄市

- 20日 13:30 受付
14:00 観察会 オニバス自生地や野鳥の観察を楽しむ
17:30 交流会 潟湖料理で交流 豊栄郷土文化財披露 福島潟の四季スライド
- 21日 8:30 開場・受付
9:00 開会 主催者挨拶
9:10 基調講演「オニバス」の現状 角野康郎(神戸大学生物学)
9:50 特別講演「世界の北限・中国のオニバス」 朱有昌(中国科学院自然資源研究所)
10:30 各地からのオニバス保護及び増殖の活動報告
12:30 パネルディスカッション「いまなぜオニバスか」
～15:30コーディネーター大熊孝 パネリスト尾崎富衛、福原晴夫、角野康郎、朱有昌

8月20日、21日には福島潟で盛り上がりましょう。

スタッフとして、または一般参加者として関わりたい方は水辺の会事務局まで。

アフリカの「水」について

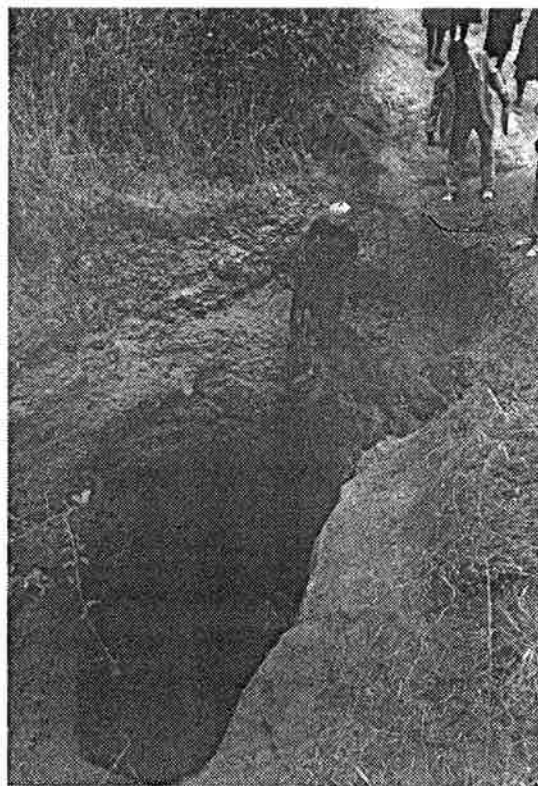
(株)グリーンシグマ 渡辺 満

蛇口をひねると水が出る。こんな当たり前のことが当たり前でない地域は世界中にたくさんある。私が青年海外協力隊隊員として2年間暮した東アフリカのタンザニアでも、農村地域では当然各家庭に水道などなく、川や井戸から水を汲むのが当たり前。稀に深井戸から汲み上げて使う公共水道があっても、水道管が破れていたりポンプが故障しているため使用できないケースが多い。ポンプを動かす燃料がないために使えないケースもある。蛇口の付いた都市部の住宅でも、水道の水圧は変動が激しく、2日や3日の断水は日常茶飯事。ちなみに私が勤務していた職場の建物は新築で3階建て程度だが、水道の水圧が低いために水が3階まで届いたことがない。水道水を前提としている現代生活において、水が出ないということがいかに不衛生であるか、水洗トイレの水がなくなったことを想像してもらえれば理解できるだろう。「蛇口をひねると水が出る」ということは、実はスゴイことなのである。

タンザニアで私が暮していた町は、ドドマという標高約1000mに位置する内陸都市である。年間平均降水量は約570mm、雨季と乾季が明瞭な半乾燥地帯にあり、市内には涸れ川(ワジ)が数本みられる程度で日本的な常に水の流れる河川はない。水道のないドドマ周辺の農村地域に住む人々は、ワジを掘り返したり点在する浅井戸から水を得ている。水汲みは主に女性の仕事で、1日に必要な量は、家族の人数や洗濯などの仕事内容にもよるが、およそバケツで2~3杯。1回の水汲みに要する時間は井戸からの距離などにより異なるが、1時間くらいかかるという意見が多いようだ。しかし乾季には井戸の水量が減るため、村民はしみ出る水をすくうために真夜中から

井戸の回りに列をつくる。こうなると1回の水汲みに2、3時間かかる。

このように苦勞して汲む井戸水だが、ドドマ周辺村落の井戸は素掘りが多く、ゴミや枯草が舞い込んだり、家畜の糞尿が雨により流れ込むこともあり、いつも濁っている。非常に不衛生であることは村民も承知しているが、飲み水とする場合はいちいち煮沸するだけの薪もなく、普通はそのまま飲む。これでは病気が絶えないのも当然である。村民の生活に近づこうと、ある日本人がその水を飲んでみたところ、一発で強烈な下痢にみまわれ1週間くらい寝込んでしまった。「蛇口をひねると水が出る」日本では、その重要さを感じることなく日々暮してしまいがちだが、タンザニアのよう



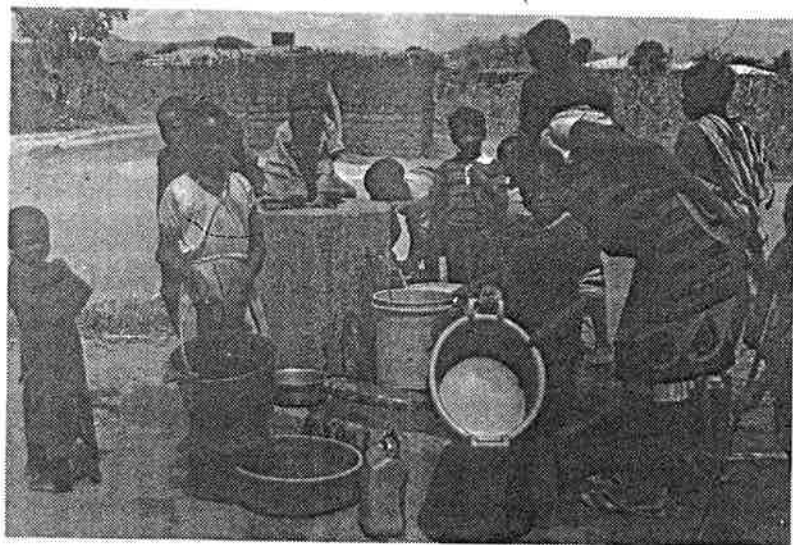
— 村での水汲みの様子 —

な国では、水汲みのために毎日時間を費やし、水のために病気が後を断たず、キレイな水を安定して確保することが最も深刻な課題となっている。

タンザニアの水事情は確かにヒドイが、だからといってすべての面を比較して日本がスゴイというわけではない。例えば、病気はあるにせよ濁った水を飲んでもヘイキである丈夫な体はスゴイ。当然、澄んだ水を飲んでもヘイキである。また、節水技術というか、少ない水を効率よく使う術を彼らは心得ている。洗い物など、わずかな水で素速く要領よく片付けてしまう。人間とは、それなりの環境ならそれなりに適応してしまうものだと感じる。そして、単に濁っている水は口にしても、農薬や化学肥料の混入には敏感で、たとえ澄んだ水でもそのような危険性のある水は口にしない。化学薬品による澄んだ水より、カエルやヘビが泳げるような「普通の水」が、彼ら（主に村民）にとっては大切なようだ。

村民にとって最も身近な「水辺」はまさに井戸ばたである。井戸ではいつも女性たちが「井戸ばた会議」に花を咲かせている。老人から子供まで、中には酔っぱらいが混ざっていることもある。普段はもっぱら噂話や他人の悪口に盛り上がっているようだが、日本人である私が仲間にはいると「水をなんとかしてくれ」と何度も頼まれた。そのズケズケとした横柄な態度に「自分達でなんとかしろ」と、つい口に出ることもある。

しかし、ここでの会話の中に水問題のさらなる深刻さを感じる。水の豊富な日本と比べると、アフリカの水問題は確かに深刻である。だからといって簡単に井戸を掘れば解決する問題でもなさそうだ。井戸完成後の維持管理は当然として、井戸を中心とするコミュニティはどうなるのか、先進国からの一方的な援助により自立心が失われはしないだろうか。まだまだ考えさせられることが多い。



— 村の公共水道 —

「援助」によりポンプと水道管が修理され水が出るようになった。しかしポンプの燃料費を政府も村民も負担することができず、現在は使われていない。

【新入者登場のコーナー】（その1）

ちの やすあき
—知野 泰明さん—

突然ながら、本号から、このようなコーナーを勝手ながら設けさせて頂き連載を始めることにしました。執筆者は、「水辺だより」の編集に前号から加わってもらった知野泰明さんです。知野さんのお人柄を会員の皆様に紹介する意味も含めて、本号から数回にわたり記事を寄せて頂くことになりました。

知野さんについては、すでに「水辺だより」本年1月号で紹介したように、大熊先生の研究室で河川工法の技術史を研究していらっしゃる方です。知野さんには2月の例会で御講演も頂いており、当日は江戸時代の河川技術について日本では知野さんからしか聞くことのできないお話がありました。

今回の連載ではこの貴重なお話についても触れてもらい、講演に出席できなかった会員の皆様方へも日本の伝統的河川工法がどんなものだったのかを、かいま見て頂こうと思います。では、よろしくお願ひします。

< ~~~~~ >

水 辺の会・会員の皆様！ 初めまして(´▽｀)。私は知野泰明と申します。本号から、連載を頼まれましたが、もともと筆不精な私で、文章も下手であり、私の書く原稿はいつも大熊先生の赤いボールペンで朱色に染められています。そんな私が寄稿するのはいささか気が引けますが、私がこれまで研究してきた内容もそろそろ世に出してみようとかと勝手に考え、しばらくの間、筆をとらせてもらうことに致しました（といってもワープロですが）。ということで、今後、数回にわたり乱文の原稿を著す失礼を前もって御詫びさせて頂くと共に、よろしくおつきあい下さるようお願い致します。

今回は、あまり込入った内容を書くには、すでに行数が足りませんので、簡単に自己紹介をすることにします。私は昭和40年6月30日(水)生れ、星座は蟹座、血液型はA型です。出身は新潟市内ですが、新潟地震を知らない世代の一人です。

現在の身分は、新潟大学大学院自然科学研究科の研究生として在籍しており、また、新潟市教育委員会の生涯学習課・文化財係の非常勤嘱託として発掘調査にもかかわっております。発掘調査の事もいずれ触れられればと思いますが、とりあえず、私がこれまで行ってきた経歴と、研究内容について著していきたいと思ひます。

私は新潟大学工学部土木工学科の出身ですが、卒業研究以来、大熊先生の御指導の下、土木史の一部を研究して参りました。私の研究課題の中心は、近世の治水技術（簡単に言えば江戸時代の河川技術）です。そのほかにも近・現代や西欧なども研究対象としています。このため、卒業研究以来、古文書読解にいそしみ、今では、「くずし字辞典」を引かずに、何とか文書の内容を理解できるまでになりました。こうして、現在の私は、理系出身ながら文系まがいの研究を行うことができるようになったわけです。

このような一種異様な経歴を持つに至る私の経緯を、数回にわたり連載させて頂きます。では、次号の予告ですが、歴史好きの人間はどのような幼少期を過ぎて生れるのかという一例として、私が大学に入学するまでの経歴を簡単に記すことにします。この少年期の経験は今の私の研究活動の原動力となっているものなのです。そこでは9年間お世話になった大熊先生ですら知らない事実が明らかとなるでしょう……。

（つづく！）

幼いころの思い出から

木村 和宏

小学校の5年生くらいのときだったと思うが、隣の町内の沼にゴミが大量に捨てられてフナだの何か小魚がたくさん腹を見せて死んで浮かんでいたのを見た。全く驚いた。小さくはない沼で周囲に木が茂り、水もよどんで相当生き物がいそうだった。そこは山間地の始りで夏になるとカブトムシやアリジゴクをつかまえに行っていた。それまでゴミが捨てられているなどとは知らなかったの、その悲惨な光景を突然見ることになった。何でこんなことになっているんだろうと呆然とながめていた。丁度その時、その近所に住んでいる同級生の女生徒がきて、「絶対こんなこと許せないよ、臭いもひどいし」と怒っていた。僕もそう思った。すぐに大人たちもこの大問題を取り上げるだろうと帰り道で考えていた。しかし、このゴミ投棄事件は僕の知っている限り、全然社会問題化しなかった。なぜなら、それは埋め立てだったのである。否ゴミ処理兼埋め立てだった。ゴミと様々な生物の死骸の上に土をかぶせて、そこは住宅地になった。あの時の驚きと怒りは、二十年経った今も解消されないまま残っている。自然環境と人間の生活、この問いに対して調和という解答がなかなか与えられないわけである。原始人の生活は人間の過去の姿であると共に未来のものでもあるという環境レポートがあったが、それを受け入れられる日まで試行錯誤が続くのだろう。



次回は 渡辺 正夫 さん

をお願いします。

6月26日(日) しん川 [通船川] ルネッサンス21の学習会

会員の星島卓美さんが、地元の新潟市木戸地区の通船川を見直そうという活動を続けていますが、この度新しい会として発足し、勉強会を開催することになりました。

大熊先生の講演もあります。通船川にこだわらずに、多くの方が聞きにくてくれるとありがたいです。

日時：6月26日(日) 午後1:00～
場所：東地区公民館(新潟市) 304号室
講師 大熊孝 テーマ「川と自然環境」
事務局：しん川ルネッサンス21 山田隆志 273-2033

高柳町じょんのび体験がありました

5月28日29日に行われた高柳水辺ウォッチングも、緑増す自然のなかで、じょんのびできてよい体験でした。

28日は粗面付斜曲面魚道と鯖石ダムを見学しました。魚が上下に移動するところが見られれば良かったのですが、この日、魚は見られませんでした。

見られたもの ・カワセミが魚道のある川の上を通っていった。すばやくて熱のようにはかみえなかった。
・ダム湖に放流されているコイの大群。
・石月さんが川底を網でひとすくいして、ヤゴや小さなエビや水生昆虫を取ってみせてくれた
・翌日早起きした人だけが、ニホンカモシカを見た。
・//早起きした人がバードウォッチング。

夜は地元の「川トンボの会」の方々と交流。鯖石川でカヌーを楽しんでいる人達です。

お話の中からは、地域の人から沸き起こってくる町づくりへの熱意が感じられました。

門出かやぶきの里は、昔の民家風の作りで、木と和紙が創り出す暖かい空間でありました。

市長と夢を語りあう会で議論沸騰！ 収拾つかず。5月30日

先号で紹介した、市長と夢を語り合う会では、各市民団体からいろいろな意見が出され、議論が積み上がるといった状況ではなく、時間切れで終わったようでした。

水辺の会からの提案(骨子)

- 水辺の回廊を 一水都新潟市への提案一
- 緑の回廊を 一水都新潟市への提案一
- 市民・産・官・学の情報交流と参加しやすいイメージを
- まちづくりの仕組みの研究開発とまちづくりの支援育成を

これらの提案に対し、すぐに回答は得られなかったので市長と水辺の会だけで懇談しませんかと提案しておきましたが、どうなることやら……。

